

史學童觀抄  
二篇  
下

リ伊5  
4051  
6-4



伊5  
號 4051  
卷 6-4

北條氏家系

維將 肥前守 貞盛之男

維時 左衛門尉上野守 從四位下

直方 左衛門佐上野介 檢非違使兼倉主

聖範 阿多見四郎

時方 北條四郎初和田 四郎大夫上三伊豆北條三住人



上野介 平直方之像

時家 北條四郎大夫

時政 北條四郎  
正治二年三月

從五位下 敏遠江  
守 任元久二年閏  
二月崩 建保三年  
正月伊豆卒 時年十六

北條四郎  
平時政之像



史學童觀抄卷四

源氏後記

北條氏

北條氏は平貞盛より出貞盛七世の裔時政其父を時家といふ  
時家の父時方祖父直方より養方直方の父維時維時父即貞盛次子  
常陸介維將より維將の後三世始て源氏と婚す子孫世々伊豆北條に  
居る因て氏より豪族を以て世源氏に屬源義朝平清盛と京師に  
戦て敗績し宗黨死亡略盡義朝の子頼朝執るれ死を宥し伊豆に  
流る時政清盛の命を以て州人伊東祐親と並よ之を監護す頼朝  
四世の祖義家恩威を東國に樹即直方の女の生所故を以時政頗る

意を頼朝に屬頼朝初伊東氏に寄其女を通男を生女の継母之を  
祐親に告ぐ祐親其男を水に投下女を江間小次郎に嫁し遂に頼朝を  
圖る頼朝逃て北條氏に依りて人問て曰聞時政の女多しと孰れ尤美  
曰長美次は否と否と者後妻に出たり頼朝次女を通せんと欲  
書を作り僕安達盛長に託し致す盛長竊に慮る次女貌無し頼朝情  
好終つと徒禍を階せんと更書を作り長女子致す前一夕次女鳩金  
函を銜に至ると夢覺て之を其姉に語姉心動て曰吾當は妹の夢を  
買ふと乃妹に其粧鏡を與て曰薄以直を償ふと旦日書を得遂に  
之を通し情好日密より女名政子時年二十是時時政京師に役し役  
満て歸路に平兼隆に遇て時政與に偕り歸る政子を以て之に妻せんと

許し則之を嫁せし其夜雨甚し政子出奔して伊豆山に匿れ頼  
朝と俱に居る兼隆之を索し得て時政素頼朝を器とし且其  
高祖の事を思ふ然とも陽怒して陰に益之厚く頼朝亦時政謀  
慮倚るを謂以深く相結託す治承四年以仁王平氏を討するの令  
至る頼朝先之を時政に示す時政遂に東國の家人を發す至る者頗る  
多し頼朝之を別室に延て曰我為に努力せよと人々各自以為己に  
厚しと而も其陰謀に至ては獨時政之を知を得たり八月時政佐々  
木定綱等八十五騎を率て夜平兼隆を襲て之を斬遂に伊豆相摸の  
豪傑を糾し糾 字書に糾す 同ト督察也以て頼朝を擁し石橋山に據政子を以て居  
守せし頼朝大庭景親と戦て敗走す時政疲而後加藤景廉狩野

史學童觀少 卷四

二

祐茂堀親家小山實政等從んを請時政之を揮ふ頼朝も從り自ら  
甲斐より其諸源を發せんと欲す長子宗時平井郷に至り伊東氏の  
兵圍中れ箭中て死す夜速く時政頼朝杉山に遇頼朝箱根に  
匿れ時政及其次子義時を以て甲斐より免自ら土肥に走り土肥實  
平をして政子を存問せし航して獵嶋に至る時政三浦義澄等と出  
て頼朝を迎ふ頼朝曰く卿何を以て此に在や時政曰く吾命を啣て北行  
中道中て自度るよ君の底所を觀んば安んぢ信を取所あるんやと故  
君を踪して此に至請是より行んと是に於て終り武田一條の諸族に抵り  
二萬人を得て頼朝を助け平氏を駿河に撃つ之を走らせ頼朝還つて  
相模國府に至り功を論じ賞を行ふ時政を以て首とす武田信義以下

之は次頼朝鎌倉府を初す政子之を内は助而して時政義時之を外  
に輔く諸將士目す北條公也以て敢て抗禮莫と明年七月政子男を  
生是を頼家と爲立て世子とす北條氏外祖を以て益貴重せし陰  
かに人心を收免以て自ら固うす頼朝嬖姫あり之を伏見廣綱の家  
に託す時政の妻牧氏之を政子に告政子性妬悍即牧宗親をして廣  
綱の宅を毀ち其姫を驅逐せしむ姫走々大多和義久に依頼頼朝之を  
聞事に託して義久の宅に往宗親を召て之を罵り親其髻を截時政  
聞て恥告はく其邑に歸る頼朝梶原景季を謂く曰く江馬は從は  
汝往く之を視よと江馬は義時なり還り報く曰く在と頼朝義時を  
召て曰く汝吾子孫を託す汝子者と已しと事釋時政鎌倉に還る

親信せしむる初の如し頼朝弟義経の勇知を忌之を除人を謀り文治元年冬親將とく之を京師に擊義経奔竄頼朝途還一時政を遣干騎を以て京師を護四索して獲は是に於て頼朝の意を以て奏請し諸國司に守護を置莊園の地頭を置所在追捕せんと允さん以時政抗辯再三終ふん自ら七國の地頭と爲り己より之を辭す是時當て大亂初て平京畿多事時政身其衝に當り事立辨せざる無一歳餘りて東歸す詔を以て從弟時定を舉て自ら代る亦頼朝の意あり頼朝嘗て富士野に獵す頼家甫て十二射を走破る中頼朝大に喜び人を以て之を政子に報せし政子曰彼將家の由月子一禽を獲何ぞ專使を煩すと頼朝之を愧正治元年正月頼朝

薨す頼家立政子髮を削尼と爲りて政事を與り聞時政從五位下に叙し遠江守に任り政所の別當と爲り大江廣元三善康信中原親能三浦義澄八田知家和田義盛以企能員安達盛長足立遠光梶原景時藤原行政等と諸政を參決け頼家狎臣五人あり教を下して曰く五人の親黨罪有ら論ずる勿れと七月登河に盜起る安達景盛を遣り之を討す景盛新に妻を京師より買殊に行を欲せざんども己を得ばして行歸れば則頼家己に其妻を奪絶ご之を愛幸す景盛怨望すと告る者有より五人をして之を討せしむ府下大に擾る時頼朝薨して纔る六閱月政子急に安達氏に如使を使はし頼家を誦しめ且曰汝我言を聽ん吾身を以て汝に箭に當ると頼家乃止政子景盛に

誓書を徴し頼家を送て以て和解せしむ因て頼家諭て曰汝が近状を視て政の倦民を忘賢を遠け佞を近け只聲色是溺親戚も礼無願は少く意を留えよ悔ふ及勿れと頼家般樂故の如く二年五月疆を争ふて訟る者あり頼家其地圖を視筆と採圖の中央抹して曰廣狹は命なり案檢を費す能はば凡疆場の訟此を以て準と為す即心厭ずんば争ふべき如はと建仁元年秋大風雨あり關東禾稼登り冷下總海盜民死者千人九月蹴鞠工紀行景を上皇に請て京師より下し是より日其技を學び復朝を視て義時の子泰時少く七器局あり密に頼家の押臣中野能成を召し謂て曰蹴鞠事も害をも獨り火異を畏ざる乎故將軍天変に逢毎に輒出遊を止是後世法とす

屋敷所のと子は親臣なり盡く嘗て試し之を諷せざる時北條飢を告泰時且往て之を視んとす僧觀清至會曰將軍能成の語を聞怒て曰く言理無あは然とも父祖を踏て言は何ぢやと公且病を稱邑に歸し其怒衰るを俟て可なりと泰時曰吾聊鄙意を侍臣に語るの豈敢て諫るならんや即譴怒せしむも避る所非但吾事ありて邑に如く且日將を發せん予子以て避ると為莫れと乃蓑笠を出して之を視し遂に邑に至邑人去歲籽種を貸り明稔之を償を約す而七稔ざるなら相與に逃亡を謀る是に於て泰時諸負債の者を召悉く其券を燒て曰父老之を安せよ饒使年豊なるとも吾復責ざるなりと乃酒食を賜人ごとく斗米を給皆泣拜祝して曰願くは君を

子孫多かりしんと三年七月泰時三浦義村の女を娶る三年七月  
 頼家疾あり政子議し其職を遜る先其管する所を分ち之を同  
 母弟千幡と子の一幡とよ與む一幡の母は比企能員の女なり能員  
 陰に異議を懷き其女をく頼家と説し頼家遠に能員を召北條  
 氏を圖んと欲政子徹之を聞急し書を作り侍女をく齊て時政に  
 致さむ時政直に大江廣元を詣りて曰能員外戚の親を恃む衆士を  
 凌蔑し今又將軍の事を省せざる小乗に命を矯て逆を圖る宜く  
 先發して之を誅す應に否乎と廣元曰僕先將軍在日より獨文墨  
 を執て議論す兵事に至ては敢て與り知らば今日の事公の心は在ん  
 のと時政即起天野遠景仁田忠常從騎中は在時政顧三人を謂て

曰能員及子等兵を將て之を伐と遠景曰老翁を殺す何ぞ必  
 兵を發せん宜く召て之を誅すべきのと時政第に至り甲を束し  
 遠景忠常を中門に伏人を遣て能員を召く能員輒往き門に入ば  
 二人突出し其左右の手を捉伏て之を斬其僕走り歸り比企一族一幡を  
 擁し其第に據義時泰時を遣兵を將て之を攻比企氏火を縱り自  
 殺す一幡焼死す頼家之を聞て大に怒り堀親家を使し密に和田義盛  
 仁田忠常に命り時政を誅せし義盛之を時政に告ぐ時政忠常を  
 召き久しく出さば其馬卒怪で歸り告忠常の二弟危疑し遂に義  
 時の第を攻義時在り家人防戦して之を斬忠常歸途之を聞遂に幕  
 府に起し加藤景廉を殺る政子終に頼家をして髪を削り伊豆に徙す



秦時券在燒  
 父老在安人  
 史論曰勵精圖  
 治專尚節儉折  
 券棄責救荒賑  
 急哀矜惻怛  
 于至誠故民思  
 慕之如赤子之  
 仰慈母而聽訟  
 折獄申理冤枉  
 不悔鰥寡不畏  
 強禦貞永式目  
 至今立為標準  
 可謂文武全才  
 矣



幾何無して薨ず是に於て千幡を以て嗣と之を時政の弟に奉名を  
實朝と更む時政妻牧氏と之を保護す侍姫阿波の局密に政子に語て  
曰牧氏笑謔中より伎心を挾む保母の任を託す爾がくばと政子以て然りと  
乃實朝を迎へ府中より置義時の弟時房を以て營中の事を掌し此  
是歲時政女婿源朝雅をして關西の守護を率往て京師を鎮せしむ元  
久元年義時相換守と為二年畠山重忠反すと告る有義時時房兵を  
將て之を撃初重忠朝雅と皆時政の婿而して朝雅娶る所牧氏より出也  
故を以て最親愛せらる是歲實朝京師に娶る重忠の子重保等をして  
之を迎へ朝雅を六波羅に候し與に飲し禮を争て相闘く朝雅終に  
之を牧氏より惡む牧氏乃時政と謀重忠父子を殺さんと欲し義時時房を

召き之を撃んと議す二子諫止す時政怒て入牧氏人を以て義時を謂し之  
て曰繼母の故を以て吾を以て讒と為すと義時已を得ずし之に従  
撃て重保を殺し遂に鶴峯に戦て重忠を斬七月時政遂に朝雅を立て  
實朝に代んと欲す實朝時政の弟に在政子諸將を遣う之を義  
時の弟に徙さむ時政の兵卒義時に歸す時政遽に髪を削りて北條  
に老す年六十八後十二年かして卒是月義時兵を遣朝雅を誅し時房  
を以て之に代武藏守と為是より先和田義盛上總の國司為人を求む  
許さば義盛書を獻し大江廣元を因て苦請す三歳命を獲乃前書  
を還んと請亦省せし建保元年義盛の子姪泉親衡に黨し故頼家の  
子を擁し亂を作んと謀る事覺る義盛請て其子宥せしむを得

遂に族を擧て幕府に抵り又其姪の宥を請姪首謀たり釋座を以て  
 義時之を縛して吏に屬す五月二日義盛輒兵を擧て及す三浦義村之  
 子黨一既して牙塚義と議一自北條氏に白す北條氏宴あり方々容  
 と棋す報至る局を終而起更に烏帽子を被水干衣を穿ち以幕府に  
 赴き大江廣元と實朝を奉り頼朝の影堂に徙り長子泰時を以て兵  
 を將て之を防む次子朝時義盛の子義秀と闘ひ創を被る義盛の兵  
 勝り乘りて進呼聲天を震ふ申より而戰星を見未だ已に泰時戰を  
 督り身士卒に先黎明撃て義盛の兵を卻け自ら衢路を阨り足利義  
 氏を遣之を追撃す敵兵復振ふ義時廣元と連署り武藏相摸諸  
 國に令り來り援けむ敵の驍將土屋義清流矢に中て死す敵兵大に

沮義盛以下敗死す泰時首虜を獻り置酒一諸將士を勞之謂て  
 曰く吾復酒を飲り疇昔宴に與り其明亂作吾甲を擐り馬の上を宿  
 醉未だ醒ば吾意今より飲を禁せんと已むに戰數十合渴りて水を  
 索葛西六郎楯を執酒を進む我輒之を飲甚く吾常操無なり吾  
 復飲りと己りて功を論り賞を行ふ泰時賞を辭て曰義盛反心は  
 獨臣が父を恨のり而して諸將士多く之が爲に死を致す臣父の爲に仇  
 を擊焉を賞を受るに宜しく臣に賞する者を以て事と死るの家を  
 恤登りと聽ば義時義盛に代り士所の別當と爲り即日書を京師に移り  
 將士を鎮安け九月故畠山重忠の季子僧重慶日光山に在り父を  
 謀る小山宗政を遣之を捕りて宗政之を斬還り報ば實朝人を以て

言一先て曰重忠寛死一其胤変を為虚實未だ必ず廢るるに汝輒之  
を斬何ぞやと宗政目を瞋して曰彼髮反跡己の明臣以て生致せざる  
所以は將軍の内謁を聽て之を宥せんを恐るる將軍詠歌蹴鞠  
の武備を廢棄一婦女を重んず戰士を輕んず諸没官の邑擧て嬖  
妄の與ふ故將軍の業墜たりと實朝怒り其朝從を禁ず幾何なく  
して解を得實朝人と為優柔歌詠の耽溺す罪ある者と雖も歌を  
獻ずれば則免れんと軍國の事一義時と決す二年冬和田氏の餘  
黨亂を京師に作成卒撃て之を夷ぐ七月鎌倉賈人の員を定む  
是時當て鎌倉權勢日盛後鳥羽上皇居常憤り源氏を滅さんを  
謀りあふ初佐を太子に讓る是を土御門帝と申奉る尋て又之を少

子に禪するは是を順徳帝と申奉る而して政常は上皇に在後白河の  
時より北面の武士を置上皇西面を益開き廣く材勇を徴し親し刀  
劍を鑄させしむ實朝を驕らせ以て之を斃さん欲し以て連し其官爵  
を進じ實朝覺るに遂に左近衛大將を求義時廣元と謂て曰故將  
軍宣下毎之を辭し以て後胤の地を為而も今將軍年未だ壯ならず  
ふるも昇進太速又家臣を以て朝せばと官爵を取し僕愚昧竊し之  
を危ふむと廣元曰僕亦之を思ふと遂に入て之を言す聽は六年遂に  
大將と為累右大臣に進む承久元年正月鶴岡祠に拜賀し故頼家公  
の子公曉に狙撃せしむ斃す公曉因て自立して將軍たりんと欲す義  
時政子の令を以て之を誅す初政子義時と熊野に詣京師を過上皇

召て政子を見ゆはんとす辭す曰東鄙の老尼禮節は閑はばと則前の相  
 國實頼の妻を以て勞せしむ政子與に語て曰實朝子なり一皇子を請  
 鎌倉の主と爲んと是に至て諸將は連署奏請せしめて曰願はば  
 一皇子を戴するを得んと上皇是に至て樹るなりと許しぬは實朝薨  
 すも及ば藤原の頼經を請初頼朝の妹婿藤原能保女を以て攝  
 政良經は妻す良經は関白兼實の子なり良經道家を生道家頼經  
 を生故を以て義時議を定先時房を遣り請て七月鎌倉に至る甫  
 二歳政子政を簾内は聽政子人と爲明決頼朝を佐け天下を定む諸  
 將士は畏服せざる目して尼將軍といふ其從二位を拜するを以て又二位の尼  
 といふ義時右京權大夫と爲陸奥守を兼廣元等と諸將を以て頼朝の

舊規を修せしむ義時の妻弟伊賀光季廣元の子親廣と並ぶ京師を  
 護衛す實朝害す遭の翌月故阿野全成の子時元兵を駿河に起し自  
 立して將軍を謀る義時兵を遣り撃つ之を殺す頼經鎌倉に  
 至る月大内の守護源頼茂子頼氏と仁壽殿に入火を縱て自殺す蓋  
 頼茂は源頼政の孫源氏の嫡宗たるを以て自立せんと圖り事覺はれ  
 誅せしむ上皇源氏衰滅し王道復す廢しと謂ふは關東の權勢自  
 如たり會關東の家人仁科盛遠二子を挈へ熊野に詣て上皇の幸ひ  
 遇其子を録して西面と爲西面  
 喜び留て東歸せしむ義時怒て其邑を收む上皇之を復さしむる詔を  
 奉せし上皇の嬖妓龜菊長江倉橋の二社を食す其地頭之を侮慢す

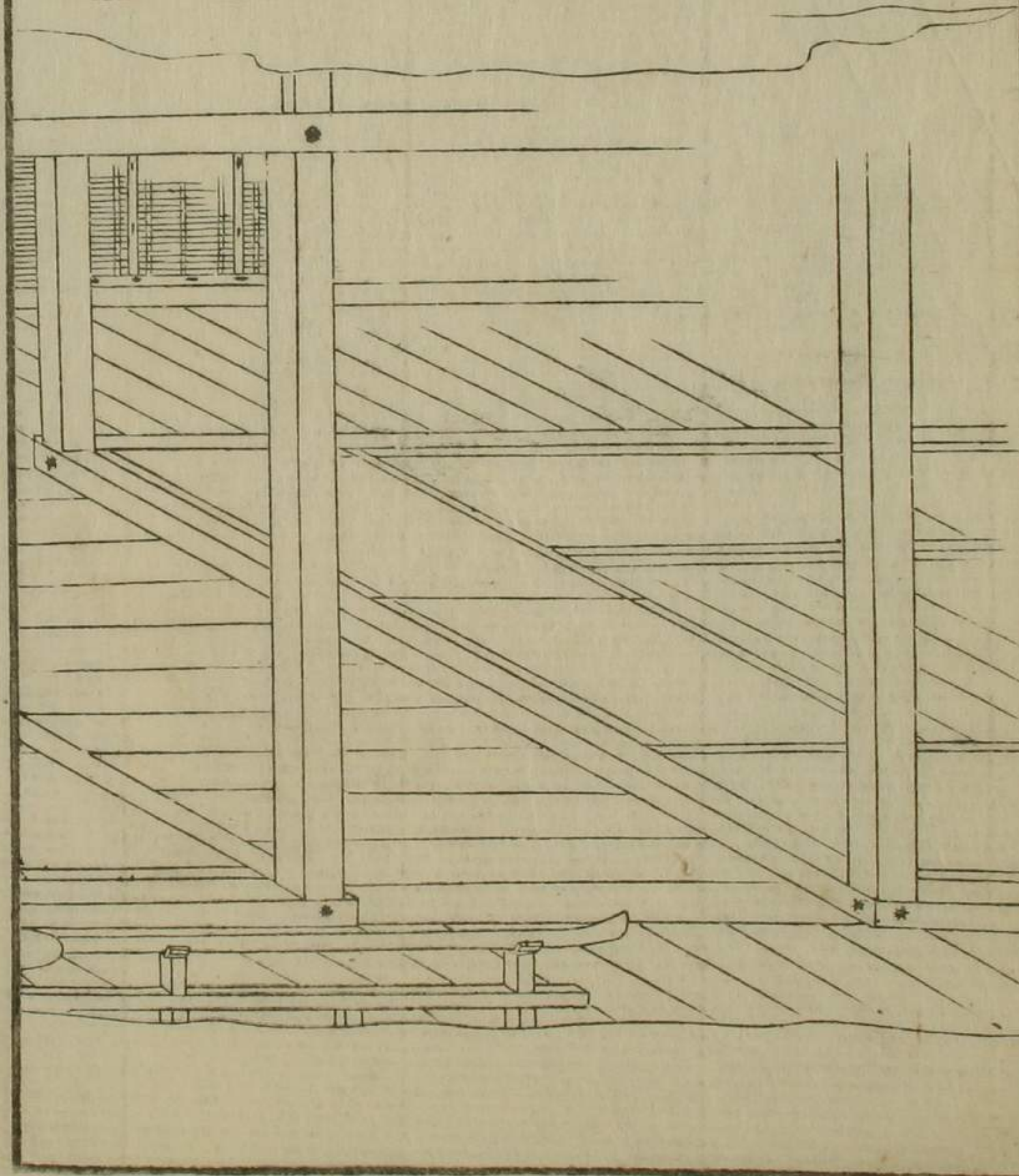
西面

此朝は始て北面の武士の外は西面の武士十人を選び置る兼久亂後斷絶す

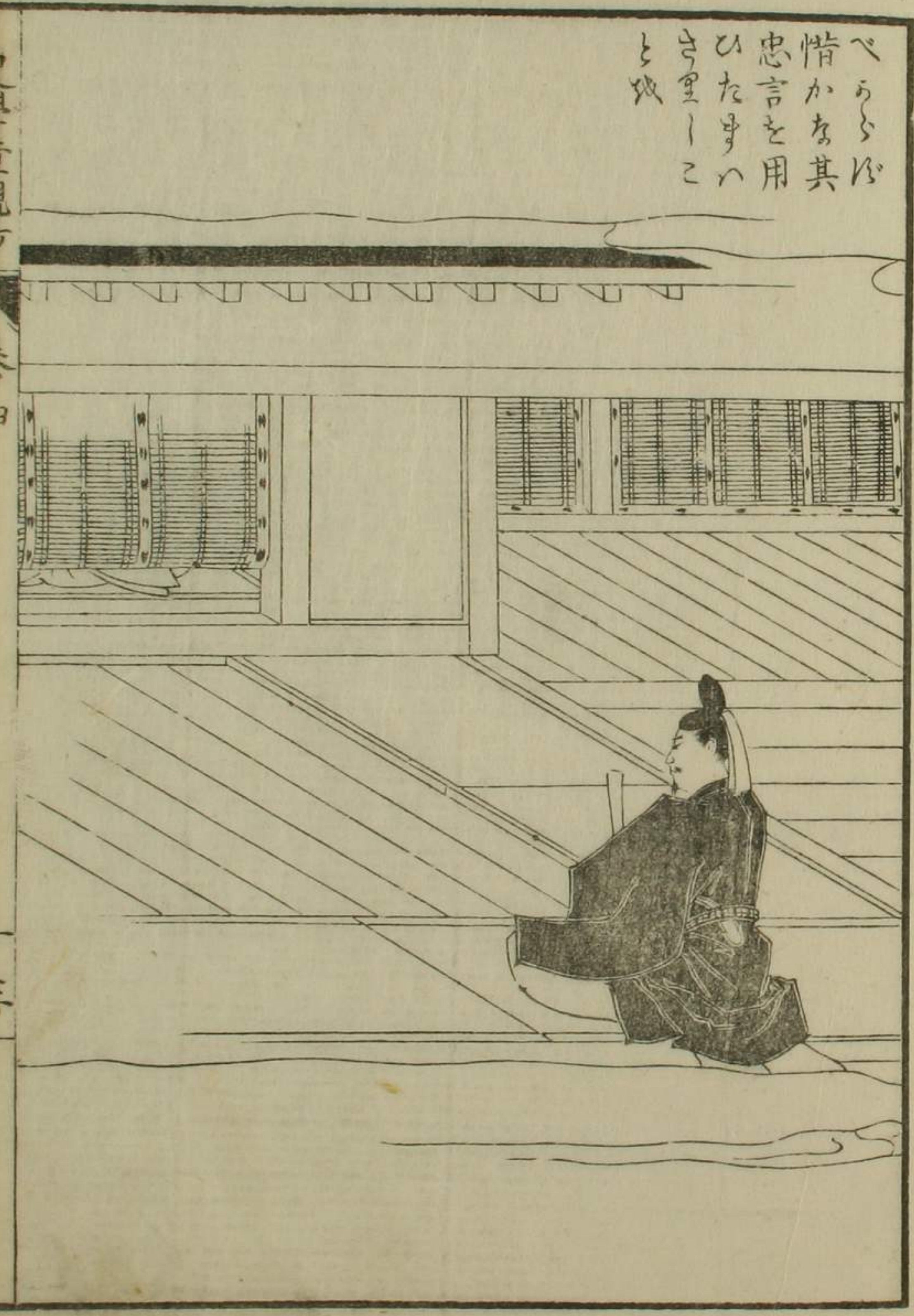
上皇怒りせぬひ其職を禊む義時對て曰先右大将王命を以て平氏を  
 誅乃請て地頭を置以て功有を賞す義時敢て故無して之を禊  
 はと上皇積怒りぬ遂に意を決して義時を討義時素より右大  
 將藤原公經と善上皇公經を殺んと欲しぬ右大臣藤原公繼之を  
 止免且諫て曰臣聞本邦稱して葦原と上原の大處是を関東とす  
 漸西して漸く小なり小を以て大に敵す時を待ばして行ふ行ふ無謀  
 を以てす臣未だ其可を知らざるなり義仲の難以て鑿ぬ小登りと權中納  
 言藤原光親も亦切に諫む上皇聽ぬはは西面藤原秀康として三浦  
 胤義を誘はむ胤義の妻初頼家の婢たり一男を生義時之を殺す  
 妻悲痛す胤義京師に成り復東しするを欲せむ秀康酒間を於

て徹之を説胤義奮躍し命に應じて曰臣が兄義村力能義時を擒  
 すと上皇大に悦み五月順徳帝をして位を太子に譲り免以計議を  
 便す太子立せぬ是を九條廢帝と申奉る上皇乃城南寺の流鏑  
 馬に託し流鏑馬やぶさるゑと云名はやばせむまの略語也文字は張衡が西京の賦の流鏑  
 鏑をいふはあはれを鏑矢の飛ぶことを流鏑といひたりふさはせへ上古より有りと云なり幾兵千七百人を徵公經を囚へ親廣  
 光季を召す親廣脅從す光季至るは胤義秀康を以て之を討  
 しむ光季及び子光綱奮鬪して死す即日の上皇五畿七道に詔し義  
 時を討將士を召問て曰東人義時を黨する者幾ら有胤義對て  
 曰千許人過り莊家定進で曰然らば彼人心を收む此は二年あり  
 之が爲に死を願ふ者計るは勝るは臣等をして東國に在り免ば

孟子曰天の時  
 地の理を如  
 く地乃理を  
 和人如之と  
 今公継乃直諫  
 を上るる地  
 を精しく陳て  
 言人如之及は  
 ざる何そや  
 蓋し當時鎌倉  
 乃権勢の盛な  
 る隨て其衆心  
 を得たる如  
 きを忌憚り  
 ていささる  
 多んを繼  
 令之を言自  
 るも聖主自  
 知たすふ  
 所無かる



べらふは  
 惜かな其  
 忠言を用  
 ひたすハ  
 さ里一こ  
 と成



亦龍本せむらんのもと上皇擇びぬは彌益兵を聚善走者狎松を遣誥を齎し東國の諸豪を歴説し特は胤義の書を作し先重賞を以て義村の哨義村之を義時を示す義時曰吾預り免此事有を知久しと因て大に鎌倉を索狎松を獲誥を奪て之を焼状を政子の啓政子乃大に諸將を簾下し會し安達景盛をして命を傳へて曰く吾今日將し諸君を訣せんとす先將軍堅を被り銳を執り草菜を闢以大業を創諸君の知所より今讒諛の徒人主を誑誤し関東の業を傾危せん欲諸君苟先將軍の恩を忘らん心を協力を戮し讒人を誅除し以舊圖を全せん即詔し應り西上せんと欲る者は即今之を決せんと諸將感激して力を效せんを願ひ敢て辭を異しすは是に於て義時の宅に會し

事を議す義村景盛等皆曰足柄箱根を阨し以官軍を待たんと廣元曰不可なり險を守日を曠せば人心内変せん是自敗るの道なり宜く直し兵を進め京師を攻成敗を天に聽きよのこし政子之に從ひ泰時を以將とす泰時時武藏守なり武藏の兵至を待て發せんと居五日廣元曰武藏の兵を待は計は非今夜武州宜く單身鞭を揚べ東兵猶雲の龍に從が如くなんのこし三善康信方病臥政子召て之を諮康信の對廣元の議の如し是に於て泰時を即夜程を發せし黎明泰時十八騎を帥て西す相摸守時房前武藏守足利義氏駿河守三浦義村等之に從ふ行三日より十萬騎を得て東海道より進む式部丞朝時北陸道より進む武田信光小笠原長清等東山道より進む凡を役



從者父行ば子留り子行ば父留る行者凡十九萬義時乃狎松を放還し  
 上言せしを曰臣罪無し討せざる敢て逃避せし聞陛下戰を好と謹  
 臣が長男泰時二男朝時以下十餘萬人を以て戰を爲し陛下之を觀  
 め猶厭めば乎ん別二十萬人の在あり臣將自將を以て之を繼んと  
 すと狎松走り歸て之を白す内外色を失ふ上皇三可なり東人必虚  
 乘下義時を誅する者あんと六月朔諸官軍を部署す宮崎定  
 範仁科盛遠等越中拒ぐ藤原秀康三浦胤義等諸將を部  
 一に九隊と一尾張美濃に拒ぐ兵凡一萬七千餘人信光長清四萬  
 騎を以て大井の渡を亂し官軍の將大内惟信を撃て之を走らす  
 胤義赴援んと欲秀康曰吾腹背敵を受退て宇治勢多を守り

若くは教旨此の如くと乃馬に鞭て先走る胤義以下皆之に従ふ官軍の  
 將山田重忠は源滿政の苗裔なり奮て留戦す泰時流を亂し前  
 重忠連射東兵を斃す泰時軍を麾て之を率る重忠敗走す官軍  
 の將鏡久綱自名を旗に書し毛利季光と戦ひ敗れて曰恨くは  
 懦夫と事を共すすと乃自殺す泰時進で信光と合す義村策を立  
 兵を分て五隊とす泰時鼓行して西す京師震駭乘輿叡山に幸す山  
 徒遜辭す力以て東軍を扞ぐ足僅と乃還る見兵二萬五千を分て宇治  
 勢多及淀を守時房勢多を攻山田重忠山徒二千と帥を橋を截す力  
 戰す時房利あり卻く泰時宇治を攻前中納言源有雅參議藤  
 原範茂等南都僧萬人を率て河を壓して陣す時霖雨水漲る

泰時且を待て進んと欲泰村夜挺前河を夾で射戦す義氏赴き援く  
 泰時遂に全軍を以て之より從ふ橋板已に撤す兵架を縁て進む官軍矢  
 石雨下す東兵多く死す泰時艾田無義を以て水を試せし春日貞幸  
 佐々木信綱等之に繼貞幸の馬傷て溺る從者援還る泰時親為舟  
 之を炙乃蘇す將士爭渡る溺者八百信綱先中嶋に連す其子重綱年  
 十五父の馬尾を攀つて渡り信綱之を還し兵を請む泰時諾し之を  
 遣り其子時氏を召て曰我報將に敗んとす汝進で之に死せ時氏乃六騎  
 を以て渡泰村之に繼泰時亦親に渡貞幸馬を扣て諫む聽し貞幸之を  
 給て曰甲を釋て渡らん不は沈溺せんと泰時馬より下り甲を釋貞幸乃  
 馬を奪て去渡を得ば其兵渡者五百騎無義信綱と皆連し進んで

官軍を冒す殺傷相當義氏民屋を撤し後を縛り以て軍を濟す泰  
 時遂に前岸に至る武藏相摸の將士奮進で大に戦ふ有雅以下潰  
 走す右衛門佐藤原朝俊八田知尚佐々木氏綱等を帥に留戦し之  
 之に死す時氏火を縱て進義村季光大納言藤原忠信を淀み攻て  
 之を破重忠胤義走歸る事を奏す上皇門を閉て納めはは重忠門  
 を撃て罵り曰懦主我を誤と遂に嵯峨に走て自殺す胤義遁走る  
 泰時進で樋口河原に至院宣使の至に遇馬より下人を以て之を讀む  
 宣す曰近日の事朕が意も出る非皆臣僚の爲所唯汝其罪を論せ  
 よ兵士をして輦下を擾るも莫れと泰時乃時房と六波羅に館す  
 朝時の北陸道に出る從軍四萬官軍弩を張弩

機を設ち弓を發し木石を懸おき機を發して木

石を彈ひ、龜すの雷なり千鈞の弩なり云々、寒原の塞を、阮す朝時夜數十牛を收、其弓を彎く力の強きを量り名をるを、新を其角を束ねて火を驅て官軍を起し、官軍弩を發す東、兵乃寨を踰り市振に至る官軍嶮を據り柵を設け東軍騎兵海を渡り歩兵柵を破り礪並山に戰ひ盛遠を殺し定範を走ら進で泰時と京師に會す是を於て東軍街衢を填塞し四出捕斬す胤義部下を以て東寺に據り佐原景吉を遣て之を攻胤義叱て曰汝吾族人は非やと與り戰ひ之を走ら盡く其騎を亡し獨り其長子と逃去り木嶋叢祠中に匿る識所の僧と遇ふ自裁を勸みより長子先死胤義僧と謂て曰我父子の首を以て之を駿州に致し我為駿州に告て曰阿兄自手足を剪當意を逞す僧其言の如くす

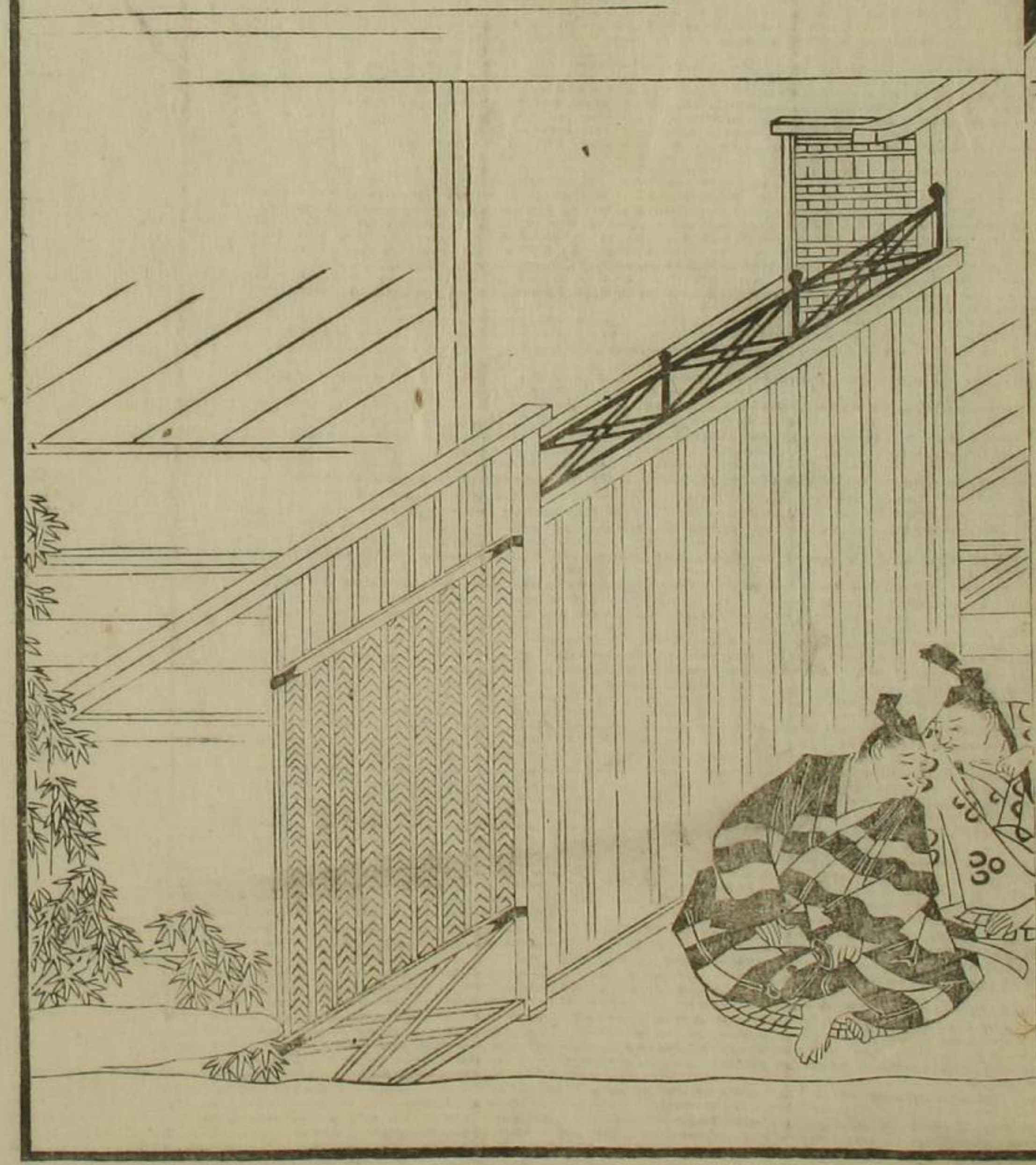
義村之を泰時に送る泰時佐く木經高上皇の謀を贊け亡て就鳥尾に匿ると聞之を宥せんと欲す經高自殺す其子高重兄の子廣綱等皆死す廣綱の穉子宥せるに廣綱の叔父信綱請て之を斬り泰時時房と議し凡罪を論ず輕く從ひ復究捕せ遂に奏して首謀の者を未上皇忠信有雅光親及中納言藤原宗行參議藤原信能を以て答ふ乃分て之を諸將に屬し時氏同渡せ所の六騎を召酒を置て之を勞し捷を鎌倉に報ず上下相慶す初義時己に軍を遣り日夜疑懼す會雷其既に震す義時大に怖れ廣元に告て曰吾命窮る乎廣元曰君臣の命皆天の司る所今事之曲直斷ん天心は在公何必に怖ん故將軍の陸奥に捷雷其陣を震す此安ん也吉兆あり吉兆ありを知んやと是を於て捷

聞果して至る廣元文治の故事を引公卿の斬を論ず泰時之を京師に  
 戮すを難み七月諸將をして之を東國に押送一留之を途に斬獨り忠  
 信其妹の嘗て實朝に適を以て死を宥一越後を流す後泰時光親の  
 諫疏を得大之を殺すを悔と是に於て義時帝を廢し高倉帝の孫  
 守貞親王の子を立是を後堀河帝と申奉る遂に上皇に逼て髮を削  
 之を隱岐に徙し順徳上皇を佐渡に兩親王を但馬備前に徙し奉る土  
 御門上皇謀る與之且之を諫め故を以て問さるる義時母教し安ん  
 ど朕獨り留るる忍びんやとのみ乃十月土佐に徙し後阿波に徙し  
 以是月秀康父子を南都に獲三千餘邑を籍没し義時之を戦功の將  
 士に分与へ自ら一も取とを海を而して北條氏勢威を今く熾ちり泰

時既官軍を破り時房と留るる京畿を鎮す四年分て六波羅南北  
 に居る之を西六波羅と号す泰時柵尾の僧高辨の名を聞往て之を  
 訪ふ高辨泰時を語て曰く國を治るる病を治るるが如し其因を究はして  
 藥すれば徒に病を益のと治乱の因を人の欲あり公苟欲を絶ち以て之  
 を率は治幾幾と泰時大悦元仁元年大旱す世以て乱逆の致す  
 所とす北條氏祈禳甚だ力む六月義時病で卒す泰時時房皆東  
 歸す政子泰時を以て執權を襲し久頼經傳とせん欲す其服亦  
 在るを以て之を疑ひ廣元は語廣元對て曰宜しく速に議を定めて人  
 心を鎮す危しと泰時八弟あり多くは後母藤原氏より出づ泰時父の邑  
 を割与へ自ら取太少し而して藤原氏其弟光宗と謀り其所生の子

義時雷震を  
怖れ其可  
否成廣元  
決す

君子對青天  
而懼聞雷霆  
而不驚履平  
地而恐步風  
波而不駛  
醉古堂劍掃  
出七君子  
たる小能奉  
拳服膺せざ  
ふ履かざら  
るの語を全



所々々み社  
雨さきや  
なる神を  
八十神の  
よつるを  
けり  
光賢



四郎政村を以て執權と其女婿參議藤原實雅を以て將軍と爲  
 んと政村の冠する三浦義村を賓と父子を約す是に於て光  
 宗弟光重と驟る三浦氏に適府下洵々口耳相屬人或泰時を警して  
 兵備を勸む泰時之を意とせ時氏及從弟時盛を六波羅に遣る二  
 人曰く鎌倉虞すやと泰時曰く京師の虞す危き如すと遂に之を  
 遣る已めて騷擾已に政子一侍女を從へ夜義村に造る義村惶恐出  
 て迎ふ政子曰く近日物議騷然政村光宗日夜子に家聚ると臆ふ  
 武州を圖る非を得んや義村曰く知ばと政子色を作して曰く何ぞ  
 知ばと人を得ん且子政村を挾て反を圖る乎抑和平を計る義村  
 乃誓て曰く四郎他ち獨り光宗微く異圖あり臣當ふ之を禁止

すと明日義村往て泰時を謁して曰く僕故太夫の眷遇を記す公と  
 四郎と僕に於て何を擇せん願ふ所へ安平に在るの日に者光宗云々と  
 欲す僕心を盡す諷導し終に服従を得ると泰時顔色自若とて  
 曰く僕政村に於て固より累隙を安んじ偏私する所有んやと居し  
 餘日府下又大擾る政子頼經を抱き泰時の第に入り義村及諸宿  
 將を召し廣元を論決せし實雅を京師に歸し光宗を信濃に流し  
 藤原氏を北條に遷す廷議又實雅を越前に流し事即定する黨与  
 を問はば嘉祿元年六月廣元卒す七月政子薨す泰時評定引付  
 の兩職を置評定天下政務の重を評議する職負引付評定衆の下司として之に後證  
 事を書留むを引付といふ近世の十二人を置是を評定衆といふ政事を諮詢す又家令を置家令家令といふは家老  
 留彼をとり官吏の類也

令の令も人ノ物を申付てつゝ事あり家令ハ職負令見へ  
たり親王又一位三位等の家令ハ朝廷より補せらるるなり  
平盛綱尾藤原綱を以て

之ヲ為す地頭ノ侵攘を禁ト京官ト枕ナクを得ざらむ  
京師ノ篝卒

を置篝卒 浴中警衛のおも所々篝火を焚く不虞に備る之四十八所の篝卒を置篝倉の  
は是ハ本ハ禁裡に属し職人所小舎人雜色と号す即衛士の事なり

將士衛府官を帯て衛るに衛るに期も後る者皆直縣官に納る貞

永元年泰時三善康連と議一式目五十條を立以て聽斷を資評

定衆十二人と誓て曰吾曹天下の司直司直 漢書百官志武帝司直を置秩二千  
石は少丞相を佐け不法を擧を掌る

万民の獄訟をあぶくり聞て其曲 と為て偏私を挾む所あり國神之を疑せ又  
直を詳し不法の事を正すの義なり

令す諸吏獄を断す輕罪其身止まら羅織あること勿れ盜竊する者

は倍して之を贖へむ武田信光と海野幸氏と界を争ふ幸氏直に

泰時之より予ふ或曰く信光公も啣む泰時曰く嚮も和田氏亂長を

宥せんを請ふ而して先人之を流す和田氏争ふ能ざるなり公私如

何を顧ふのみ怨を畏く決せんバ何ぞ執権を取らんやと信光之

と聞自ら懼ん書と效し他無きを誓ふ泰時以て諸將を示し終

に恒例となす嘉禎二年泰時從四位に進む仁治三年六月卒す年

六十泰時人と為親族に敦一常は叔父時房を推て之より下る又権政

を以て自ら異せざる常は諸將と幕府に更直す老に逮て懈らば當

直の夕敢て辱せざるなり頼朝の墳に詣る毎に堂下に拜す或曰く

盍ぞよとざる曰く將軍在せし時吾未だ登るを得ざりし豈將軍を死

せんとせんやと其四位に進む人謂て曰く功ありて爵に進む恐く

の終りを保ざり吾將に神に祈るとす僧あり之を説て曰く一佛寺を

建て以て治安すべしと曰く財を糜一民を蠹す何の治安う之有んと  
遂に其僧を逐ふ泰時銳意治を求む其政府に參する衆を先に入  
躬勤儉を執り以て將士を率ふ常に將士の貪るる者を救ふ饑歲に  
遇ば倉を發し之を賑はし或ハ場を設きて流民を救濟す其卒する  
丹及て天下之を惜む子時氏先づ卒孫經時嗣て執權と爲る泰時  
常に儒人を愛し經時謂て曰く政を爲す文に在り武断を專らふ  
用ふ處をばと經時吏事長す世に祖父の風有と稱す遂に其官を  
襲ふ寛元二年將軍頼經賊を其子頼嗣に譲る甫て六歳四年經時  
疾あり亦執權を弑時頼を傳へ而して卒す故朝時の子光時頼經の  
寵あり因て勸めを時頼を圖り自ら之を代ふんと欲し兵士と府下

集む時頼吏卒を遣衢路を扼し兵を以て自ら衛る頼經の使者來る  
見を許さば光時髪を削て罪を謝す之を伊豆に流し頼經を送る  
京師に還す其近士三浦光村潛し兵を其邑に徵し其兄前若狹守  
泰村に反を勸む泰村果さば泰村を義村の子なり時義村已に卒し  
泰村威權仍盛族黨最廣し五月鶴岡祠前に榜あり曰く泰村將  
に誅せんといふと時頼事に因て三浦氏に寄宿す氏族悉く集り  
酒を獻ず送し出更らるる時頼頗る之を怪し夜に障内より鎧  
冑の聲あり決起して曰く果して然りとて從者を麾き徒歩して歸る  
泰村驚惋して措け翌夜時頼人を召し三浦の諸第を訶はしむる  
皆兵仗を蓄ふ時頼益戒心あり將士之を聞爭ひ至る明日泰村第に



匿名の書あり曰く子將を誅せんとす蓋を戒むる泰村曰是  
我を毒する者と取て之を毀り人を以て時頼を謝せしめて曰く道  
路の言を聞ふ泰時は関するものごとく家僕傳聞争ふて来り相  
衛る尤怪する當に速に之を散去すべし如し事他人の関せば率由  
以て援を奉せんと時頼慰諭し遣歸す大江季光の妻は泰村の  
妹なり来て其兄の意を決し反せんを勸む亦果さば時頼の誓書至  
る會速に兵を罷し泰村大に喜び之に従ふ使者出づ其妻賀して  
食を進む泰村一啜未だ下は能はば門外忽大に罵り安達氏の兵  
来り攻泰村聘貽し急に之を防ぐ時頼身時定を遣兵を將る援を  
三浦氏を攻り先金澤實時を以て幕府を守らしむ實時は泰時の

弟實泰の子なり大江季光將に往て時頼に屬せんとす其妻愠て曰く  
良人は士に非ざるなりと季光乃泰村に屬す時頼人を以て三浦氏の北  
隣に火を放し泰村大に敗れ走て頼朝の影堂に入光村八十騎を以て  
永福寺に據り以て泰村を呼ぶ泰村往て光村乃堂中に至る諸  
軍之を圍む三浦氏の宗族影前は列坐す光村慷慨して曰く向きよ  
殿下の密旨に從はば我族將に軍政を專せんとして若州猶豫して以  
此辱を取と刀を引て自ら其面を劈問て曰く猶識ぬやと遂に  
自殺す泰村泣て曰く我四世功を幕府に積又北條氏の外戚を以て  
内外を輔佐す乃禍を免る能はざるものと遂に其族二百七十二人と皆  
死す諸三浦氏の妻孥皆之を釋す後泰村の女野本尼乱を作すを

謀りて殺さる時頼の祖父重時六波羅北方を鎮す建長元年召至る  
並に執権より時頼相模守と為る四年道家暴卒す頼嗣又時頼  
を圖り長久連等を遣り諸將士を誘ひ佐々木氏信縛して之を時頼に  
送る時頼乃頼嗣を廢し送る京師に還る後嵯峨帝の皇子宗尊親  
王を迎へ鎌倉の主と爲す政子の志を成らし時頼泰時の式目を循  
守す内外治を稱す而して其自ら奉ずる人の堪ざる所多し大佛宣時  
は時房の孫なり嘗て時頼に詣り己に深夜時頼一壺酒を手はせ曰  
子と之を共せん欲す顧ふ安ん有を得んと紙燭を照し度子素て  
菜は殘醬の有を觀取て酒を佐く其儉薄此の如く其人を用ひ門  
地を拘はるに嘗て青砥藤綱を庶人より擢藤綱少くを學を好と

僧行印を師とす年早し遭時頼僧を聚えて之を施し又親と三島  
の祠に祈る其束載の牛水を洩す藤綱傍に在て叱て曰汝も亦北  
條公の薦事な故ふる衆其説を問ふ曰方早し牛も之を知る有は  
盍ぞ田を洩せざる今之僧を施す其貪廉を甄せは廉者は寧飢とも  
來らず徒に貪者を飽すのとは是を牛の水を洩するも異をんやと時  
頼之を聞きて見共し語り大之を説び竟に擢て引付衆と爲す公文  
なる者有北條氏の封人と畔を争ふて訟ふ衆皆時頼を畏て公文を  
曲して獨藤綱之を直すと公文之を徳と報んが爲る夜る錢を苞は  
其後圃に投じて去藤綱大怒て曰く相模公天下の直と司る公文を  
直とするは乃相模公を直とするなり公宜く報つるは是を何ぞ対るやと

徒然神曰  
平の宣時朝臣  
老乃の時頼の許  
かりあるもこの間  
よき事ありし  
みゆかしく申さる  
直衣の無きと  
かきせしむる又使  
来りし物これなと  
のさしむるや夜  
あき異様なりと  
とくをいふは  
たのむるは  
かきせしむる  
とくをいふは  
此きけをひら  
あき異様なり



志れんば申はる  
なりさかたこと  
かた人なるもの  
すうぬんさうぬ  
さ物やあやと  
いふことあり  
先たすへとあり  
くまをくはして  
くまをくはして  
ゆき臺所乃  
棚よこわすけよ  
みえは少しはき  
たつを見出さ  
これぞと見得  
てさあ物と申  
ふ事た全な  
んとて快く敷  
献まてひて興  
よけれ侍りき



昔の道徳五執國  
命のた黄老及  
之清夜深探  
着厨中鼓一  
味堪調の海  
美 佩川

其錢を郵還す嘗て夜行十錢を水中に遺は乃炬を買ひ水を照し  
之を撈る炬直五十錢或曰く得る失ふ所を償はばと藤綱曰五十錢  
吾失ふて人得十錢は誰か之を得る者あん吾六十錢を取て世益す  
亦大を得るぢやと藤綱自ら儉しと施を好む目よ一肺を食し布  
衣袴褶刀室漆せに時頼之が祿を加へんと欲して曰く神夢に我を見  
て曰汝治を願はば藤綱の祿を増と藤綱固辭して曰く神藤綱の祿  
を増して之を増はば神藤綱の首を斬といはば之を斬んやと時頼  
又從容其欲する所を問ふ藤綱乃鎌倉及び諸州吏の奸狀を陳て曰く  
管子の階前千里門外萬里と稱する是なりと乃其尤奸なる者を  
罰す世此を以て時頼人を得ると云康元元年時頼病あり髪を

削る時頼嘗て禪を宋僧道隆丹學び建長寺を造り又最明寺  
を造りて此より老長子時宗猶幼なり故に重時の子長時を以て執権  
たりと弘長三年時頼卒す卒す臨して偈を作曰業鏡高懸三十  
七年一槌破碎大道坦然と享年三十七也時宗年十三從五位下  
叙し左馬頭に任す外舅安達泰盛軍政に參與す文永三年將軍  
宗尊疾を稱して出ず府下頗る物議あり宗尊遂に京師に還る  
其子惟康を立て之に代ふ七年長時卒す時宗執権となる庶兄時  
輔長時の弟義宗と俱に六波羅を鎮す時輔居常快く弟を降る  
を愧ぶ九年二月時宗義宗をして時輔を撃し之を殺す其異志  
有の聞ゆり因て時宗人と為強毅撓まじ幼しと射を善す

弘長中大極樂寺の第射あり將軍小笠懸を觀んと欲し

**小笠懸**

頼朝の時より始るといふ説は非なり寛治六年二月七日加渡多河原より義綱朝臣の武士共の笠懸射しこと中右記に見へり頼朝の時ありたし法式を定められたし遠笠懸

小笠懸とも其始洋なり諸士に命ぜりて敢て應ずる者なし時頼曰太郎之

的の制は軍器考に見えりを能せんとなつて場の上る時年十一馬を跨て出一發して中萬衆

を能せんとなつて場の上る時年十一馬を跨て出一發して中萬衆

齊しく呼時頼曰此兒必は負荷に任んと是時當て宋氏胡元の

滅され諸隣國皆元の服す獨我邦使聘を通はば元主忽必烈韓

人を以て書を我に致し曰服せざんは則兵を尋んと朝廷之を鎌倉に

議す時宗其書辭無礼なるを以て執て不可とす元主復使者趙良

弼を來し時宗太宰府に令して之を逐返す凡元使の至る前後六

反皆拒て約は十一年十月元兵一萬をかり來て對馬を攻む地頭宗

助國之に死す轉し壹岐に至る守護代平景隆之に死す守護代は其國の

本守護を以て他の守護を兼帶するなりをいふなり事六波羅に報す鎮西の諸將をして起し拒

がむ少貳景資力戦し射て虜將劉復亨を殪す虜兵亂奔す而

して元主必初志を遂んと欲し後宇多天皇建治元年元の使者杜世

忠何文著等九輩長門に至り留て去らば必は我報を得んと欲す時

宗之を鎌倉に致し龍の口を斬り上総介北條實政を以て鎮西の探

題と為探題近世の所司代のごとく遠境の政所を以て中国なれば九州

六波羅を置て東兵を遣て京師を衛ふ先西兵の衛者ハ悉く實政

即ち探題なりと從ひ先太宰府に水城を築き冗費を省きて兵備を充つ

弘安二年元使周福等復太宰府に至る復之を斬元主我再使者を

誅すを聞則憤恚一夫舟師を發一漢胡韓兵を合一凡十餘萬人范文虎を以て之を將と入寇す四年七月水城に至り舳艫相衝む實政の將草野七郎潛兵艦二艘を以て志賀嶋を激撃首虜二十餘級を斬虜大艦を列孫鐵鎖之を聯ね弩を其上に敷我兵近づくを得河野通有奮前虜の矢其左肘中通有益前之檣を仆して虜艦を架之登り虜將王冠を擒す安達次郎大友藏人踵進む虜終に岸上る能わぬ鷹嶋に收り據る時宗宇都宮貞綱を遣り兵將に實政を援多し未だ到らば閏日大風雷一虜艦敗壞す少貳景資等奮撃一虜兵を虜す伏屍海を蔽歩して行軍一虜兵十萬脱れ歸る者纔に三人元復我邊を窺は

さかひ時宗の力なり七年時宗卒す子貞時甫十四繼で執権一父の官爵を襲ふ安達泰盛外祖を以て益專となり太宰府の捷其子弟與て力有威望日盛内管領平頼綱と権を争ふ内管領を即家令なり

**内管領**  
内管領とは後世のふ家老のことなり家令といふは義なり其家はそ人の頭となり物事の指しをせしめ付る役由ふ家令といふなり此名義の史記の高祖本紀に出たり 泰盛の子宗景性狂易其曾祖實を頼朝の子と謂也遂に姓源氏に改む頼綱因て之を譖曰彼姓を更む將軍たるを冀ふ也十一月貞時兵を發一安達氏を夷滅一頼綱獨政を執後頼綱亦反を圖る其長子宗綱之を貞時告ぐ乃頼綱を誅一宗綱を流す正應二年九月府下騷擾す貞時惟康を廢一之を京師に送還す東人曰將軍京師に流せり

乃後深草帝の三子久明を請て將軍と為し永仁元年長門探題  
 を置四年僧良基故源範頼の裔吉見義世誂亂を謀る捕て  
 之を誅け正安三年貞時髪を削り老時頼の孫師時政村の子時村  
 をて並代と執権たり師時の從弟宗方權を爭ひ命を矯つて先  
 時村を殺し遂に師時を殺んと欲す貞時怒り宣時の子宗宣命し  
 之を誅す延慶元年久明を廢し其長子守邦を立て之に代ふ應長元  
 年貞時師時相繼て卒す貞時意を政治に留時頼の風を慕ひ功  
 績ありて貞時既卒し長子高時甫て九歳宗宣及び時村の孫  
 熙時並執権れを幾くして皆卒す長時の姪基時及び實時の孫  
 金澤貞顯之に代り高時の舅安達時顯を泰盛の弟なり内官領

長崎圓喜之頼綱の甥なり貞時の遺命を以て共々高時を輔く五年  
 遂に高時を立て執権と為し文保元年高時相摸守と為る高時性  
 頑率政を時顯圓喜に委す二人心を協せ泰時の舊規を修す既而  
 圓喜老子高資之に代り高資性多欲黜陟予奪一に賄を以  
 て成元亨二年陸奥人安藤堯勢其族季長と邑を争ふて訟ふ  
 皆高資に賂ふ高資兩之を納て決せば二人怒り邑を據て反す  
 承久以来士の北條氏に叛く者此に始る北條氏兵を遣て之を討  
 り克は高時以て意を為し日々飲宴す一日狗の庭に鬪ふを見  
 之を喜び遂に吏民をて焚を貢せし焚数千諸將を分附し  
 養視せし輿載往來し焚に遇て下る者誅あり焚群鬪哮噉

尸を争ふ者の状のごとしし高時又田樂を喜む

正一、雅樂、非、  
但、田野の樂と言

心、名、け、ら、也、是、僧、形、を、歌、舞、或、ハ、手、玉、を、搦、り、長、き、棒、の、本、の、方、に、横、木、を、十、字、に、付、  
之、二、兩、足、を、あ、ら、け、か、り、か、り、を、す、ま、り、今、世、た、ら、ふ、の、田、樂、と、い、ふ、の、其、形、又、似、く、り、出、た、り、

名樂師亦数千纏頭費每二萬を以て数ふ一夕高時獨醉舞す十

四倡あり来り歌ひ以て之を助く姫人之を闕へは倡の皆天狗なり

歌と曰天王寺の妖靈星を見ば名と歌ひ終て去れば獸跡坐り満

高時醒て見る所よし己て疾あり高資髪を削り職を貞頭

み譲らんを勸む高時の弟泰家其己譲らんを愠り亦髪を

削り高時病起貞頭を誅せん欲す貞頭自ら髪を削り之を謝す

諸將争て之を做ふ圓顛朝満つ高時又高資不平あり密に長

崎高頼を誅せし高資覺り高頼を捕て之を流す内

外憤怒す攝津渡部氏大和越智氏皆兵を起す高時吏に命

之を撃つ又克正中二年高時中納言資朝を佐渡に流す其北條

氏を圖るを以てなり初北條氏承久の乱を定先後堀川帝を立て

帝位を太子に傳ふ是を四條帝と為帝崩るもつて朝議煩徳

の皇子を立てんと欲す泰時土御門帝の乱謀を與てせむけざるを思ひ

安達義景を遣其皇子を立て之を後嵯峨帝と申奉る帝の二子

後深草龜山相繼ぐ位を昇りもつて後嵯峨特に龜山を愛し

時頼を遺詔し龜山の後永く皇統を承り長講堂の領を以

後深草の湯沐の邑とす後深草上皇時宗を倚り以て政柄を得

んと欲す時宗敢て從はれ己しと龜山位を太子に傳ふ是を後

深草の湯沐の邑とす後深草上皇時宗を倚り以て政柄を得

んと欲す時宗敢て從はれ己しと龜山位を太子に傳ふ是を後



宇多帝と申奉る上皇憤恨より髪を削んと欲す時宗乃上皇の皇子を以て後宇多の儲貳とて是を伏見帝と申奉る立て三年賊淺原為頼とつる者あり夜る宮中に入り逆を謀るに成るは自殺す六波羅之を檢し事龜山上皇と連る上皇御書を貞時賜ひ他なきを誓ひ帝密に貞時を勅し曰ふ龜山の位は在兼久の事を憤り陰に圖る所あり而とも發せし其後を立るの卿が利ある事と申奉る後宇多の皇子を立是を後伏見帝と申奉る後宇多上皇使を遣て貞時を責め貞時乃帝を廢し後宇多の皇子を立是を後一條帝と申奉る因て議を定て後深草龜山の三紗十年毎に更立んと嚮る時頼藤原氏を五派に分ち更攝籙を任す貞時の天

位を議る蓋之は倣ふなり帝崩るに後伏見の弟を立是を花園帝と申奉る朝議後一條の皇子邦良を立其後を承りんと欲す龜山上皇特は意を後宇多の次子に属しめし使を遣し貞時を諭し之を立見ぬは是を後醍醐帝と申奉る邦良を其太子なり帝北條氏の陪臣を以て世廢立を主るを憤り陰に之を滅せんを謀り高時の政を失するを竊し喜せぬは資朝及び右少辨俊基等をして土岐頼兼多治見國長等を誘致せし或之を六波羅の北方北條範貞に告會攝津民乱を作す範貞因て四十八所の籌卒を召三千人を得頼兼國長を襲ふに之を殺す是時正中元年九月より明年五月高時兵を遣り資朝俊基を收致し之を案問す服は

鎌倉勢義貞の軍と  
入間川を戦ふ

入間川は武州戸田  
川の上流より入  
間郡に在り此川よ  
り以南を武蔵野と  
いふ

みい田ふ一本槍  
しね乃とて候きこ  
屋敷がみゆら  
むとて時原  
信古



遂に廢立を謀る帝因て誓書を賜ふ高時其書を奉還俊基を  
 釋資朝を流す嘉曆元年邦良薨す帝初邦良を廢尊良  
 を立んと欲す高時不可是に至ると又三子護良を立んと欲し使を遣し  
 後嵯峨の遺命を申高時貞時の議を執後伏見帝の子量仁を  
 立て東宮と爲帝怒らせぬ護良と謀り諸寺の僧徒を誘護良  
 を以て山門の座主と爲し僧圓觀等を召し北條氏を咒詛す元弘  
 元年事覺れ圓觀等を捕へ鞠し實を得再び俊基を執ふ後伏  
 見法皇亦人を來し先具す帝の陰謀を告高時乃大に諸將吏を  
 聚て計を問ふ衆敢て言なり高資曰主上親王と之を流し公卿の黨  
 する者之を斬るの事再び悔を貽す勿れと二階堂貞藤諫て曰く

北條氏世王室を尊び下民を惠む國命を執百六十年は幾き所  
 以たり今已に公卿を執へ又帝王を遷んと欲す天道を如何苟くも  
 我を以て興無くも一たび朝廷何をの能爲ん高資貞藤を睥  
 睨して曰迂腐の論何ぞ今日に陳せん公獨り承久の故事を知ばやと  
 高時之に従ひ八月貞藤等を遣り三千騎を以て京師に入基時の  
 子仲時政村の曾孫時益方は南北を鎮す貞藤と與り事を謀る  
 事泄る帝逃れて南都に之仲時時益兵を遣り宮中を索し獲れ  
 則兩上皇太子を六波羅北方に奉す僧の豪譽帝叡山にありと  
 告るとり近江の守護を遣り兵を將とし之を攻ると利ありは已み  
 して南都の僧來て帝の笠置山に在ると告ぐ二帥乃近江の兵を以て

叡山<sup>いひ</sup>備<sup>た</sup>檢斷<sup>けんたん</sup>槽谷<sup>さうや</sup>宗秋<sup>そうしゅう</sup>隅田<sup>ぐまた</sup>通倫<sup>つうりん</sup>等を遣<sup>や</sup>り

付<sup>つ</sup>の理非<sup>りひ</sup>を吃<sup>く</sup>となら<sup>ら</sup>分<sup>わ</sup>る義<sup>ぎ</sup>是<sup>こゝ</sup>採<sup>と</sup>題<sup>だい</sup>なるの

固<sup>か</sup>を拔<sup>ひ</sup>ば高<sup>たか</sup>時<sup>とき</sup>大<sup>だい</sup>佛<sup>ぶつ</sup>貞<sup>てい</sup>直<sup>ちく</sup>金<sup>きん</sup>澤<sup>さく</sup>貞<sup>てい</sup>冬<sup>とう</sup>を遣<sup>や</sup>り

た至<sup>いた</sup>しむる<sup>る</sup>陶<sup>たう</sup>山<sup>さん</sup>義<sup>ぎ</sup>高<sup>こう</sup>小<sup>せう</sup>見<sup>けん</sup>山<sup>さん</sup>氏<sup>し</sup>真<sup>ま</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>を率<sup>ひき</sup>る

城<sup>じやう</sup>に縦<sup>たて</sup>て入<sup>い</sup>り火<sup>ひ</sup>を縦<sup>たて</sup>て呼<sup>よ</sup>謀<sup>ぼう</sup>外<sup>がい</sup>兵<sup>へい</sup>之<sup>の</sup>應<sup>おう</sup>ず

遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を隠<sup>かく</sup>岐<sup>き</sup>に徒<sup>た</sup>す千<sup>ち</sup>葉<sup>えつ</sup>貞<sup>てい</sup>胤<sup>いん</sup>小<sup>せう</sup>山<sup>さん</sup>秀<sup>しゅう</sup>朝<sup>てう</sup>佐<sup>さ</sup>々<sup>々</sup>木<sup>き</sup>高<sup>こう</sup>氏<sup>し</sup>兵<sup>へい</sup>將<sup>しやう</sup>と

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

を遣<sup>や</sup>り量<sup>りやう</sup>仁<sup>に</sup>を立<sup>た</sup>位<sup>ゐ</sup>に即<sup>す</sup>是<sup>こゝ</sup>を光<sup>こう</sup>嚴<sup>げん</sup>帝<sup>てい</sup>と申<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る

流を乱し來り撃つ我兵又大敗る時己は夜たり新帝西上皇を  
 六波羅に入れ二帥大兵を七條磧に出す陶山高通河野通盛蒼戰  
 則村を走らす則村退き走す八幡山崎を扼し運路を梗塞す二帥  
 兵を遣り之を撃伏し陥り敗れ還る山徒亦護良の令を以て來り攻  
 二帥曠騎を遣り曠騎凡迅捷の者を曠と云ふ唐二宿衛の兵を曠騎と云ふ即ち京師二宿衛の所乃兵也僧兵を撃  
 走し近江の守護佐々木時信を以て之に備ふ高通通盛又則村を  
 京南に敗る而して官軍の將源忠顯の大兵來り攻む二帥甲を悉く  
 乘り時信五千人を以て忠顯を撃走らす而して結城親光官軍に  
 降り士卒多く逃る二帥急を鎌倉に告ぐ使者相踵ぐ四月高時名越  
 高家足利高氏後尊氏と改む等を遣り西上し半京師を守り半行在を攻

高家は朝時五世の孫なり則村は孤川に戦ひ箭中して死す高氏傍觀  
 して戦はば馬より下り飲を張り遂に官軍に降り兵を合して京師を  
 攻む京師の兵三萬大半吏胥なり戰に習はば二帥乃溝を深し  
 壘を固く之を守り忠顯を撃卻し己は城兵大に潰え餘る  
 者千餘人二帥乃夜西上皇新帝太子を奉り城を空し東走す土  
 兵環り起り射る太子以下四走す矢新主の肘に中る時益之り死す大  
 明亦敵數百に遇ふ撃破て過ぐ明日番馬驛に至る土兵數千人龜山皇  
 子の子守良を奉り路を夾んで陳す宗秋其前鋒を撃破る而して  
 兵疲れ矢益き走り佛寺に入り仲時と謀り近江の一城を據んと欲  
 す時又近江の守護殿して後之を待み至ると仲時曰く是れ

叛すか乃其兵二謂て曰吾首を官軍に獻せよ是我が諸君の勞を  
 報うる所なりと乃自殺す宗秋以下四百餘人從て死す新主西上  
 皇收まぬと京師に入る高時未だ之を知り獨り高氏の叛すを  
 を聞上野下野等六國の兵を發し弟泰家を附し西上せんとす因て  
 糧と諸邑を徴す次を新田義貞の邑に至る義貞其吏を斬る高時  
 大に怒り金澤貞將櫻田貞國を遣り道を分て義貞を攻む貞國  
 義貞と入間河を戦ひ殺傷相當る退いて桑河を次し明日又戦ひ  
 利ありて退て分陪を次す高時泰家を遣り之を援け黎明  
 兵三千人を以て齊く射せしめ全軍之を從ひ大に義貞の軍を破る  
 既し勝驕る備を設る會三浦義勝叛して義貞に屬し兵を合

して來り襲ふ泰家駛き走る横溝某安保某還り鬪て之を死す  
 而して小山千葉の二族も皆叛き貞將與て戦ひ敗走す諸軍敗  
 れて鎌倉に歸れば又六波羅の敗聞至る内外色を失ふ一日を間て  
 義貞二道より來り攻高時乃基時貞直守時を遣る守時長時  
 の孫より足利高氏の妻兄なり子囊坂に拒く大に敗れ曰く吾  
 猜疑を被る速に死に如く乃自殺す貞直極樂寺坂に拒ぎ敗れ  
 退く家臣本間某罪有る家居せし是日出戦ひ敵將大館宗氏を  
 斬り首を貞直に獻し自殺す貞直感激し敵陣を冒して死す基  
 時義貞と假糺坂に相持す義貞兵を選み自ら稻村崎より入り火を  
 府中に縱つ高時千餘人を以て東勝寺の先登し逃る貞將戦死し

基時國時鹽飽聖遠父子皆自殺—三道の軍皆潰ぬ安東聖秀極  
 樂寺より還れぬ府第已に灰とちる憤激—を曰百年の跡何ぞ一死  
 節の屍無けんやと馬より下りて將に死せんとは其從女を義貞乃  
 妻と爲書を贈つて之を招き降す聖秀色を作—使者に謂て曰く  
 吾姪は士家の女何ぞ此恥無き事言を爲す義貞も亦之を呵止せざる  
 やと書を以て刀を握り腹を割て死す義貞の軍進んで府中に入る  
 復抗する者な—獨り長崎高資の子高重力戦す敵四面之に萃る  
 高重左右に衝突—を向ふ所皆披とく還て高時見ると曰く事已  
 此に至る公自ら圖を爲しわす然とも臣猶一快戦を欲す公且之を  
 待りて乃其愛馬を乗り百餘騎と幟を撒刃を裹み新田氏の軍

に雜入—義貞を狙撃す及に垂—と覺れ敵兵之を圍む高重乃  
 大呼奮撃—馬上に敵の一將を掀げ数歩の外に投ぐ敵軍辟易  
 す高重走て東勝寺に至れば高時以下方は訣飲す觴を高重に  
 属す高重三酌—を之を構津道準に傳へて自ら屠り腸を抉—  
 之を出す道準笑つて曰く好下物なりと因て満酌半を盃—以て  
 諏訪直性—に傳へて死す直性長崎圓喜皆死す高時乃自殺す從  
 死する者凡に六千八百餘人高時に二子あり萬壽龜壽といひ萬壽  
 の母兄五大院宗繁高時の遺託を受け萬壽を匿す義貞高時の  
 遺胤を購り求む宗繁萬壽を斬て送ると欲—物議を憚り乃  
 萬壽を給とて曰く敵且來り捕へんと宜しと伊豆に逃はし萬壽

之從宗繁走、義貞告追獲之、斬義貞宗繁の爲す  
 所を疾み將之を誅せん、宗繁亡匿す、舎す者なく道に餓  
 死す、初泰家密に諏訪盛高に諭して曰く、萬壽既に宗繁に託す、汝  
 龜壽を奉り以て後圖を爲せ、家兄自ら禍を招くと、之を天宣遠  
 我祖宗の徳を忘んやと、龜壽猶從て母所に在り、盛高往て之を  
 取去て、信濃に走り諏訪の祠官頼重の家を匿す、泰家既に盛高を  
 遣り自ら脱走せん、欲し重傷を被り郷に歸る者の狀を爲し、畚中舟  
 臥し、襪衣を以て自ら覆ひ、南部景家伊達匡衡の舁り、免二卒、新田  
 氏の號を繫騎して先導せし陸奥に走る、餘兵三百餘人其行乃遠  
 きを度り、第二火にて自殺す、新田氏至り泰家已に死せりと爲す、鎌

倉と六波羅と十吾を間て皆夷滅す、長門の探題時直、時房乃  
 第五子なり、土居氏得能氏に攻られ航して東走し、高時の死を聞  
 筑紫に還んと欲す、筑紫の探題北條英時、亦少貳貞経に攻殺  
 する時直貞経に因り降り死を宥せられ、邑に歸り尋て病卒す、淡  
 河時治、時房の孫なり、初越前に屯し、北陸道を阨す、已は越  
 中の守護名越時、有戦死し、平泉の僧兵来り、時治を攻時治妻子と  
 皆自殺す、時直時房の亡ぶ録、倉六波羅と皆同月なり、是月大佛高  
 直二階堂貞藤、長崎高資等、千窟の圍を解退て、南都を保つ、七月  
 京師を犯さん、を謀るに官軍来り、攻高直等、髪を削りて降り、阿  
 弥陀峰に斬る、貞藤は嘗て高時を諫めざるを以て、特に死を宥せ



られ邑に歸り尋で又を謀り誅せしむ。明年赤橋重時僧憲法及び  
 本間澁谷規矩絲田氏等並び起り皆敗死す而して泰家陸奥よ  
 り潛り京師に來り藤原公宗に依る公宗は公經の裔なり北條氏  
 と舊あり相俱に朝廷を窺伺す時、朝廷政を失し天下の士民皆  
 北條氏を思ふ泰家は是に於て髮を蓄へ名を時興と更む時、龜  
 壽信濃に在り亦時行と名け期を約して京師を攻む事覺れ公宗  
 誅せしむ時興逃亡し終る所を知らず時行諏訪頼重と黨故を  
 招き聚め旬日五萬人を得東足利直義を鎌倉に攻む之を走らす  
 尊氏京師より來り討時行名越時基を遣り三萬人を將して逆え  
 擊發するに臨んで大風屋を破る時基更日をと一兼行して橋本に

戦ふ後軍亡者多し且戦ひ且退く相摸河を阻み陣す水方は漲時  
 基備へは足利氏夜濟し擊時基大に敗れ三百人と走り歸る頼重  
 時行を脱走せし四十餘人と面を剥ぎ自殺す足利氏至り時行  
 既に死せしむ時行兵を起し二旬めして敗す世之を目して二十日  
 前代といふ時行の起る名越時兼亦北國に起り時行の敗るは  
 及で加賀の將士に攻滅さる延元二年時行使を遣り吉野の行在  
 詰り上言す曰臣が父誅し伏す臣敢て怨む所を足利尊氏世  
 恩を臣が家を受て卒に之を背き今又天子を困む臣願くは尊氏  
 を討以て父の罪を贖ふと詔して之を許さる尋て五千人を以て伊豆  
 に發し官軍の將源頭家に従ひ足利義詮を鎌倉に擊ち退けし

史學童觀抄卷四終  
美濃に至り上杉憲顯等と青野原に戦ひ轉戦して和泉に至り顯  
家の敗するに及び終に行宮に起き左馬頭に任す三年宗良親王に  
從ひ遠江に至り今川範氏の兵を匹馬驛に撃破り親王に從ひ井伊  
高顯に投じ亦終る所を知らば

史學童觀抄卷四終

明治三庚午歲二月

從吾所好齋藏版

賣弘書肆

和泉屋金右衛門

